

## 【SNS を利用した論文広報①：概要】

【笠間 和喜】（所属：iJapan 株式会社）

### 【発表内容】

論文のアウトリーチ活動は、著者及び学術出版社、所属施設にとっての主要なテーマの1つである。研究インパクトを上げるために自身の研究を引用してもらうことは著者にとって非常に重要であり、これは学術出版社にとっても学術雑誌のインパクトファクターを上げることにつながる。また、研究者の所属施設においても共同研究の促進や研究インパクトの向上が期待される。

現在、オープンアクセスが発展して、学術出版業界においても論文のオープンアクセス化が進んでいる。また、研究者側の論文公開にとどまらず、人工知能等を利用して論文データを機械可読させるなどの様々な取り組みが進んでおり、論文自体のアウトリーチの可読性も高まっている。しかし実際問題として、いくら様々なサイトに学術論文や抄録を掲載しても、他の分野の研究者や一般の読者にその内容を理解してもらい、引用まで辿り着いてもらうことは非常に困難である。

また、論文の引用率を上げるための一般的な方法として、本当に該当論文を必要とする研究者にダイレクトメールを送付して利用してもらうことがあげられるが、これにも様々な課題がある。まず、昨今は学問分野の多様化と細分化が進み、同じ学問分野でも横の研究室で何を行っているか不明なことも珍しくなく、本当に自分の論文が必要な著者にたどり着くには様々な努力が必要となってきた。電子メールを利用するダイレクトメールは簡単にジャンクメールとなってしまうリスクがあり、さらに受け取ったユーザの受信拒否等の操作により、今後一切ダイレクトメールを届けることができない可能性がある。

こうした状況の中で、欧米では学術論文をわかりやすく解説する Plain Language Summary (Lay Summary: 以後 PLS) という手法と SNS とを融合させて、自身の研究分野を幅広く広報するアプローチが注目を集めている。EU での法律、US の政府内や出版社など様々な分野で PLS 活動が行われ、その結果として学術出版社や科学助成機関で PLS の掲載が進んでいる。また、それらの PLS 公表数の増加に伴い、忙しい著者をサポートする PLS の外注サービスや、出版社や学会および大学による PLS の書き方講習会など、様々な形で PLS を促進するための活動が広がっている。

今回は、この PLS の動向や学術雑誌での採択状況についての情報を提供するとともに、この後に続く日本動物学会の発表と共同する形で、PLS と SNS を利用した広報活動の事例を報告する。